

LIVING MODERNITY

EXPERIMENTS IN THE EXCEPTIONAL

AND EVERYDAY 1920s–1970s

リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s–1970s

ル・コルビュジエ | Le Corbusier

藤井厚二 | Koji Fujii

2025.3.19.WED水–6.30.MON月

Closed | Tuesdays 休館日 | 毎週火曜日

ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ | Ludwig Mies van der Rohe

Closed on May 7(Wed.), Open on April 29, May 6(Tue.)

4月29日(火・祝)と5月6日(火・祝)は開館、5月7日(水)は休館

Opening hours | 10:00–18:00 *10:00–20:00 on Fridays and Saturdays *Last admission 30 minutes before closing
開館時間 | 10:00–18:00 ※毎週金・土曜日は20:00まで ※入場は閉館の30分前まで

土浦亀城 | Kameki Tsuchiura

Venue | The National Art Center, Tokyo/Special Exhibition Gallery 1E/2E

会場 | 国立新美術館 企画展示室1E/2E(東京・六本木)

リナ・ボ・バルディ | Lina Bo Bardi

Organized by | The National Art Center, Tokyo; The Tokyo Shimbun; Japan Arts Council; Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

主催 | 国立新美術館、東京新聞、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁

アルヴァ・アアルト | Alvar Aalto

LIVING Modernity

リビング・モダニティ

Experiments in the Exceptional and Everyday 1920s-1970s
住まいの実験 1920s-1970s

本展覧会では、20世紀にはじまった住宅をめぐる革新的な試みを、衛生、素材、窓、キッチン、調度、メディア、ランドスケープという、モダン・ハウスを特徴づける7つの観点から再考します。そして、特に力を入れてご紹介する傑作14邸を中心に、20世紀の住まいの実験を、写真や図面、スケッチ、模型、家具、テキスタイル、食器、雑誌やグラフィックなどを通じて多角的に検証します。

1920年代以降、ル・コルビュジエ(1887-1965年)やルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ(1886-1969年)といった多くの建築家が、時代とともに普及した新たな技術を用いて、機能的で快適な住まいを探求しました。その実験的なヴィジョンと革新的なアイデアは、やがて日常へと波及し、人々の暮らしを大きく変えていきました。

本展覧会は、当代の暮らしを根本から問い直し、快適性や機能性、そして芸術性の向上を目指した建築家たちが設計した、戸建ての住宅をご紹介するものです。1920年代から70年代にかけて建てられたそれらのモダン・ハウスは、国際的に隆盛したモダニズム建築の造形に呼応しつつも、時代や地域、気候風土、社会とも密接につながり、家族の属性や住まい手の個性をも色濃く反映しています。理想の生活を追い求めた建築家たちによる暮らしの革新は、それぞれの住宅に固有の文脈と切り離せない関係にあるのです。

一方、それらの住宅は、近代において浮上してきた普遍的な課題を解決するものでもありました。身体を清潔に保つための衛生設備、光や風を取り込む開放的なガラス窓、家事労働を軽減するキッチン、暮らしを彩る椅子や照明などの調度、そして住まいに取り込まれた豊かなランドスケープは、20世紀に入り、住宅建築のあり方を決定づける重要な要素となったのです。そして、こうした新しい住まいのイメージは、住宅展示や雑誌などを通じて視覚的に流布していました。

今から100年ほど前、実験的な試みとして始まった住まいのモダニティは、人々の日常へと浸透し、今なお、かたちを変えて息づいています。本展覧会は、今日の私たちの暮らしのものを見つめ直す機会にもなるでしょう。

展覧会の見どころ

1. 戸建ての個人住宅　私たちの暮らしにかかわる展覧会

今日の私たちにとって、居間やキッチンを間取りの中心に据え、快適な衛生設備と家族の個室を備えた戸建て住宅は、普遍的な住まいに見えるかもしれません。しかし、歴史的に見るとそれは、戦後に核家族が主流となるのにつれて定着した比較的新しい住まいの形式です。20世紀に普及した戸建て住宅は、住み手の理想を色濃く反映した、多様な暮らしを生み出してきました。こうした住まいの革新が国際的に広がっていった1920年代から70年代までに着目する本展覧会では、14邸の住宅を中心に、私たちの暮らしの礎を見直します。

2. 有名建築家たちの住まいに対する熱いまなざし

本展覧会で取り上げる住宅を設計したのは、大規模建築も数多く手がけた著名な建築家たちです。そうした時代をリードする建築家たちの創作の根底には、日常的な暮らしへの大きな関心があったのです。今回ご紹介する住宅の多くは、建築家たちの自邸です。それらは新たな建築観を示すかっこうの実験の場でした。細部まで工夫を凝らしたこだわりの自邸からは、機能や快適さの探究はもちろん、住まうことの楽しさや喜びへの真摯なまなざしも垣間見ることができます。

3. 国内外から集結するさまざまな作品とイメージ

本展覧会には、国内はもとより、アメリカやヨーロッパ、ブラジルなどから、貴重な作品が集結します。図面、模型、外観や内観の写真に加え、ミース・ファン・デル・ローエやアルヴァ・アルトなど、建築家自らが描いたドローイング、建築家が住まいとともにデザインした家具や生活道具、映像など、バラエティに富んだ内容をご紹介します。本展覧会は、多様な作品とイメージを通じて、住まいを多角的に見直すものです。

4. 100年前に誕生したモダン・ハウス、今も使われている名作家具や照明器具

本展覧会で取り上げる住宅のデザイン、そして多くの建築家が住まいにあわせて手がけた椅子や机、照明器具は、今の私たちから見ても非常に「モダン」です。家具や器具の多くは、今なお生産され、使い続けられています。日ごろ何気なく目にしている名作のルーツには、建築家やデザイナーたちの、機能と造形に対する時代を越えた普遍的な問いがあったといえるでしょう。

5. ミース・ファン・デル・ローエの未完のプロジェクト「ロー・ハウス」を原寸大で実現

1階の企画展示室1Eでの展示に続き、2階の天井高8メートルの企画展示室2Eでは、ミース・ファン・デル・ローエの「ロー・ハウス」プロジェクトを、原寸大で実現します。また2階の会場では、同時代にデザインされて、現在も使われている名作家具を体感できるコーナーを設け、VR体験ができるイベントも開催します。そのほか、トークイベントなども、この2階の会場内で行います。なお、2階の会場は、ミースの「ロー・ハウス」の体験を含めて、どなたでも無料でお楽しみいただけます。

展覧会の構成

本展覧会では、特に力を入れてご紹介する傑作14邸を中心に、20世紀の建築家たちの挑戦を以下の7つの観点に着目してご紹介します。

衛生: 清潔さという文化

HYGIENE: creating a culture of cleanliness

2020年に始まった新型コロナウイルス感染症の流行からも分かるように、古来、感染症の克服は、人類が生き延びるための重要な課題のひとつです。急速に都市化が進み、人々が密集して暮らすようになった19世紀のヨーロッパでは、感染症から身を守るため、公衆衛生に対する関心が深まりました。そして、病原体を特定し、適切に処方されるようになった医学の進歩とともに、住まいも科学的に見直されるようになりました。本展覧会でご紹介するモダン・ハウスの浴室や洗面には、清潔さや健康といった近代における衛生と身体への眼差しがあらわれています。

素材: 機能の発見

MATERIALITY: discovering physical functions

20世紀の初頭、鉄やコンクリートによる新たな構造法が広まり、住まいの建設に用いられるようになりました。ガラスの大量生産も可能になり、住まいはそれまでの重々しい素材から解放されていきます。時代の変化に刺激をうけた建築家たちは、鉄やガラスのみならず、木材やタイル、テキスタイルといった伝統的な素材にも、新しい住まいの快適さを生み出す可能性を探求しました。本展覧会では、モダン・ハウスにおける新たな素材の使われ方を紹介します。

窓: 内と外をつなぐ

WINDOW: framing indoor/outdoor living

鉄やコンクリートによる新たな構造法の導入によって、大きく変容したのが窓でした。ヨーロッパのかつての石造りの建物では、開口部の大きさに限りがありました。しかし、強度を増した建物には大きなガラス窓を設置することができ、そこから日光や風を得るだけでなく、窓を閉めても眺望を楽しむことができました。このことは、それまでの屋内と屋外の境界に対する考え方を本質的に変え、窓を通じて、内と外が浸透するようになったのです。本展覧会で取り上げるモダン・ハウスの個性的な窓をとおして、内と外をつなぐ豊かな演出をみることができるでしょう。

キッチン: 現代のかまど

* | 広報用画像

KITCHEN: modernizing the hearth

工業が発展した19世紀には、労働の効率が重視されるようになりました。こうした考えは住まいにも入り込み、キッチンに反映されていきます。1926年にドイツのフランクフルトの集合住宅のために設計されたフランクフルト・キッチンは、少ない動作で効率よく調理や配膳ができるように工夫された、いわゆるシステム・キッチンの先駆けでした。炊事場は、ヨーロッパでは地下、日本では土間など、住まいの裏に置かれました。しかし、核家族が主流になるにつれてそれは、食堂や居間に近い、家族が集う明るく中心的な空間に組み入れられるようになりました。そこには、女性の多様な生き方も反映されています。モダン・ハウスのキッチンには、家事をとりまく社会的な考え方の変容が映しとられています。

調度: 心地よさの創造**FURNISHINGS: creating comfortable living**

19世紀のヨーロッパでは、過去の様式を脈絡なく模倣し、質的にも粗悪な量産品が巷にあふれたことへの反省から、さまざまなデザイン運動が生まれました。20世紀にこれを引き継ぎ、後の世に大きな影響を与えたのが、1919年にドイツのヴァイマルに開校したバウハウスでした。バウハウスは、織物、金属器、照明や家具など、身の廻りの品々に、機械生産にも適合したシンプルで機能的なデザインをほどこしました。また、調度にも統一感や快適さをもとめた多くの建築家たちは、家具などを自らデザインしました。本展覧会では、人々の美意識までをも変えたバウハウスの作品群をはじめとし、20世紀の人々の暮らしを彩ったさまざまな調度を紹介します。



* オットー・リンディッヒ《ココアポット》1923年
炻器 宇都宮美術館
Otto Lindig, Cocoa Pot, 1923,
stoneware, Utsunomiya Museum of Art



* マルセル・ブロイラー《サイドチェア B32》
1928年 スティールパイプ、木、藤細工
ミサワホーム株式会社 撮影: 立木圭之介
Marcel Breuer, Side Chair B32, 1928,
tubular steel, wood and wickerwork,
MISAWA HOMES CO., LTD.
Photo: Keinosuke Tachiki

メディア: 暮らしのイメージ**MEDIA: visualizing the dwelling**

19世紀における写真の発明や印刷技術の向上を経て、20世紀に入ると、マスメディアとしての新聞や雑誌の影響力がますます強くなりました。建築家やデザイナーもこれを強く意識し、ル・コルビュジエや藤井厚二などは、自らの考えを活字やイメージで世に広めようとしました。また、1927年にドイツ工作連盟が開催した「住居」展など、20世紀以降、戸建て住宅の普及とともに住宅の展示も広く行われるようになりました。本展覧会では、人々を魅了する理想的な暮らしのイメージを伝えたメディアとして、書籍や雑誌、住宅展示などを取り上げます。

ランドスケープ: 住まいと自然**LANDSCAPE: living in nature**

住むための人工的な空間を、地形を含めた自然の環境にどう位置付けるのか。自然との調和をもとめるランドスケープをめぐる課題は、20世紀のモダン・ハウスにとっても重要な問いとなりました。私たちは、大きなガラス窓を通じて、変化する四季、成長を続ける植生を身近に感じることができます。このことは窓だけではなく、衛生にも密接にかかわります。急速な近代化によって失われた自然とのつながりを住まいに取り戻すことは、心身の健康にもつながるからです。本展覧会では、ランドスケープという観点から、住まいと自然を調和させようという試みについて考察します。

14邸の鍵となる住宅

* | 広報用画像

1. ル・コルビュジエ ヴィラ・ル・ラク 1923年

Le Corbusier, Villa «Le Lac», 1923

スイスのレマン湖畔に、ル・コルビュジエが両親のために建てた小さな住宅。ほどなく母ひとりが住むようになった。湖に面した11mの長い窓が特徴の細長いコンパクトな空間には、来客時のベッドも含めて、必要最小限の設備が機能的におさめられている。

2. 藤井厚二 聽竹居 1928年

Koji Fujii, Chochikukyo, 1928

京都の大山崎町の山林に建つ、藤井の5番目の自邸。家族と暮らした「本屋」、趣味を探求した「閑室」、来客を招いた「茶室(下閑室)」からなる。木造モダニズムの傑作と称されるが、日本の気候風土や生活様式を意識した工夫が凝らされている。藤井は、住まいと暮らしに関する自らの先進的な考えを論じた英語の書籍も刊行した。



* 藤井厚二 聽竹居 1928年 撮影: 古川泰造
Koji Fujii, Chochikukyo, 1928
Photo: Taizo Furukawa

3. ミース・ファン・デル・ローエ トゥーゲントハット邸 1930年

Mies van der Rohe, Tugendhat House, 1930

チェコ共和国のブルノ市にある、織維業で成功したトゥーゲントハット夫妻の邸宅。通りから見ると平屋のようだが、高台の地形を生かした3階建ての建物である。内部には、ミースがデザインした家具が置かれた。鉄の独立柱で支えられた空間は、カーテンや縞瑪瑙の間仕切りなどで、機能的に緩やかに区切られている。



ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ
トゥーゲントハット邸 1930年
Ludwig Mies van der Rohe,
Tugendhat House, 1930

4. ピエール・シャロー ガラスの家 1932年

Pierre Chareau, Maison de Verre, 1932

パリの婦人科医のクリニック兼住居として設計された。別の居住者がいた3階建ての建物の最上階を鉄骨で支えつつ、下2層を解体して3フロアが新設された。ガラスブロックのファサードで覆われた内部は、グリッド状に仕切られ、窓や棚、扉などには、機械仕掛けのさまざまな可動システムが導入されている。



ピエール・シャロー ガラスの家 1932年
撮影: 新建築社写真部
Pierre Chareau, Maison de Verre, 1932
Photo: Shinkenchiku-sha

5. 土浦亀城 土浦亀城邸 1935年

Kameki Tsuchiura, Tsuchiura Kameki House, 1935

土浦夫妻によるふたつ目の自邸。東京の上大崎に建てられた木造乾式構造の建物は、様式、インフラとともに欧米の最新の動向を取り入れつつ、日本の風土にも適合するよう設計された。内部は、敷地の高低差を生かした5つのフロアでゆるやかに繋げられている。信子は、家事労働の軽減を意図して台所を機能的に設計している。



土浦亀城 土浦亀城邸 1935年 撮影: 楠瀬友将
Kameki Tsuchiura,
Tsuchiura Kameki House, 1935
Photo: Tomoyuki Kusunose

6. リナ・ボ・バルディ ガラスの家 1951年

Lina Bo Bardi, Casa de Vidro, 1951

イタリア出身のボ・バルディが、ブラジル国籍を得た1951年にサンパウロに建てた自邸。高台のガラスファサードで覆われた建物の周囲には、建築家自身が吟味して植物を植えた。植物や土着の文化に関心が高いボ・バルディは、その開放的な室内を、地元の木材を使って自ら制作した家具や、アートディーラーの夫とともに集めた美術品や民芸品で満たした。



* リナ・ボ・バルディ ガラスの家 1951年
Lina Bo Bardi, Casa de Vidro, 1951

7. 広瀬鎌二 SH-1 1953年

Kenji Hirose, SH-1, 1953

本住宅は、広瀬がSH-72まで手がけた鉄骨造りの「SHシリーズ」の記念すべき第一作。1953年に鎌倉材木座に建てられたこの自邸は、極限まで細くした鉄骨のほか、ガラス、レンガ、コンクリートなどの工業製品を材料とした、きわめて実験的な住宅だった。



アルヴァ・アアルト ムーラッサロの実験住宅
1954年 撮影: 新建築社写真部
Alvar Aalto,
Muuratsalo Experimental House, 1952
Photo: Shinkenchiku-sha

8. アルヴァ・アアルト ムーラッサロの実験住宅 1954年

Alvar Aalto, Murtala Experimental House, 1954

フィンランドのパイエンネ湖にある小さな島、ムーラッサロ島に建てられた、夏を過ごすための自邸。入江から伸びた小道の先のレンガやタイルで覆われた中庭のある本住宅は、敷地内のサウナ小屋や船着場とともにデザインされた。自然との調和や共生を目指したアアルトの思想がよく伝ってくる。

9. ジャン・プルーヴェ ナンシーの家 1954年

Jean Prouve, Jean Prouve's House in Nancy, 1954

エンジニアだったプルーヴェが、自身が経営していた工場の部材をもちいて組み建てた自邸。構想段階からの変更を余儀なくされながら、プルーヴェ自身が設計、施工までも手がけた。傾斜地に最小限の平地を整え、ありあわせの部材を組み合わせて造られた細長い建物には、ナンシーの街を見渡すさまざまなタイプの窓が設置されている。



ジャン・プルーヴェ ナンシーの家 1954年

撮影: 新建築社写真部

Jean Prouve, Jean Prouve's House in Nancy, 1954 Photo: Shinkenchiku-sha

10. エーロ・サーリネン、アレキサンダー・ジラード、ダン・カイリー

ミラー邸 1957年

**Eero Saarinen, Alexander Girard, Dan Kiley,
Miller House, 1957**

アメリカの実業家、ミラー夫妻の依頼により、インディアナ州コロンバスにサーリネンが設計した豪奢な邸宅。内装にはジラードも参加し、造園家のカイリーが庭園を担当した。見事な調度とランドスケープを取り込んだ広大な庭を含め、きわめて豪奢な邸宅である。



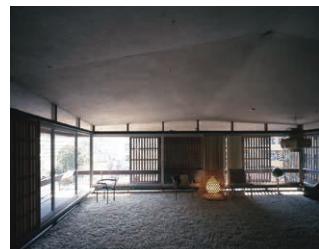
エーロ・サーリネン、アレクサンダー・ジラード、ダン・カイリー ミラー邸 1957年

Eero Saarinen, Alexander Girard, Dan Kiley, Miller House, 1957

11. 菊竹清訓、菊竹紀枝 スカイハウス 1958年

Kiyonori and Norie Kikutake, Sky House, 1958

都市や建築も有機的に成長するとする建築運動「メタボリズム(新陳代謝)」を代表する菊竹の自邸。コンクリートの柱で持ち上げられた10×10mのワンルームの周囲に、「ムーブネット」と呼ばれる台所や浴室が、交換可能なものとして設置された。後に、カプセル状の子ども部屋のムーブネットも居住空間から1階のピロティに吊り下げられた。



菊竹清訓、菊竹紀枝 スカイハウス 1958年

撮影: 新建築社写真部

Kiyonori and Norie Kikutake, Sky House, 1958 Photo: Shinkenchiku-sha

12. ピエール・コニッグ ケース・スタディ・ハウス #22 1959年

Pierre Koenig, Case Study House #22, 1959

アメリカの建築雑誌『アーツ・アンド・アーキテクチュア』が企画した実験住宅プログラム「ケース・スタディ・ハウス」のひとつで、スタール邸とも呼ばれる。ロサンゼルスを一望する天井までのガラス壁で囲まれた建物は、映画や雑誌など数々のメディアに登場した。開放的なアイランド型キッチンが設置されている。



ピエール・コニッグ ケース・スタディ・ハウス#22 1959年

撮影: 新建築社写真部

Pierre Koenig, Case Study House #22, 1959 Photo: Shinkenchiku-sha

13. ルイス・カーン フィッシャー邸 1967年

Louis Kahn, Fisher House, 1967

アメリカのフィラデルフィア郊外の自然豊かな場所に建つ。キューブ状のふたつの建物を、片方45度ずらして接続している。暖炉の脇にあるリビングの窓辺には、美しい景観を切り取るガラス窓や風を取り込む開閉窓、人が佇めるベンチなど、さまざまな用途が組み合わされている。



ルイス・カーン フィッシャー邸 1967年
Louis Kahn, Fisher House, 1967
撮影: 新建築社写真部

14. フランク・ゲーリー フランク&ベルタ・ゲーリー邸 1978年

Frank Gehry, Frank & Berta Gehry House, 1978

アメリカのカリフォルニア州の、ありふれた建売の住宅を独自に拡張した自邸。使われている建材もまた、波型鉄板やチェーンリンクフェンス、既成の木材など、規格化された量産品である。ゲーリーは、既存の建物を大胆に再構築した本住宅によって、一躍その名を国際的に知られるようになった。



* フランク・ゲーリー
フランク&ベルタ・ゲーリー邸 1978年
Frank Gehry,
Frank & Berta Gehry House, 1978
© Frank O. Gehry. Getty Research Institute,
Los Angeles (2017.M.66)

監修

岸和郎

建築家、K.ASSOCIATES/Architects主宰。京都大学名誉教授、京都工芸繊維大学名誉教授、京都美術工芸大学大学院特任教授。カリフォルニア大学バークレー校、マサチューセッツ工科大学で客員教授を歴任。AIA 名誉フェロー、日本建築家協会新人賞、日本建築学会賞受賞など、国内外において受賞多数。主な作品に、日本橋の家(1992)、紫野和久傳(1995)、山口大学医学部創立50周年記念会館(1997)、ライカ銀座店(2006)、京都芸術大学望天館(2019)、新行政棟・文化庁移転施設(2022)などがある。世界各地で、多数の著書および作品集を刊行。



ゲスト・キュレーター

ケン・タダシ・オオシマ

ワシントン大学建築学部教授。建築史、建築理論、デザインを担当。ハーバード大学デザイン学院、カリフォルニア大学ロサンゼルス校客員教授。コロンビア大学で建築史と建築理論で博士号取得。建築史学会会員(2016-18に会長を務める)。企画した主な展覧会として「フランク・ロイド・ライト 世界を結ぶ建築」展(2023-24、豊田市美術館、パナソニック汐留美術館、青森県立美術館)。著書に『Kiyonori Kikutake Between Land and Sea』(2015)、『Global Ends—Towards the Beginning』(2012)、『International Architecture in Interwar Japan: Constructing Kokusai Kenchiku』(2009)、『Arata Isozaki』(2009)など。『Architectural Review』、『Architectural Theory Review』、『Journal of the Society of Architectural Historians』、『建築文化』、『Japan Architect』など国内外の雑誌に寄稿。



アソシエイト・キュレーター

佐々木啓

東京工業大学建築学系助教(2019-24)、建築意匠・設計論を担当。東京工業大学建築学科卒業後、スイス連邦工科大学チューリッヒ校 派遣交換留学(2009-10)。『住居類型における組成事実からみた現代住宅作品』で博士号取得(東京工業大学)。共著に『いま語り継がれるカーンの靈氣: ルイス・カーン研究連続講演会活動記録』(2024)、『コモナリティーズ: ふるまいの生産』(2014)などがあるほか、現代建築の創作に関する論文多数。



会場構成

長田直之

建築家、ICU一級建築士事務所主宰。奈良女子大学工学部教授。福井大学工学部建築学科卒業(1990)。安藤忠雄建築研究所を経て、1994年にICU一級建築士事務所を共同設立。文化庁新進芸術家海外留学制度により、フィレンツェ大学留学(2002-03)。第24回日本建築家協会「JIA新人賞」(2014)、中部建築賞 住宅部門 入賞(2015)、2023年度グッドデザイン賞(2023)など受賞多数。数多くの個人住宅、集合住宅を手掛けるほか、展覧会の会場構成として、「artificial heart: 川崎和男展」(2006、金沢21世紀美術館)「米田知子 暗なきところで逢えれば」展(2014、姫路市立美術館)などがある。



アート・ディレクション

田中義久

グラフィックデザイナー・美術家、デザイン事務所 centre Inc. 主宰。国際グラフィック連盟、日本グラフィックデザイン協会会員。2004年武蔵野美術大学卒業。飯田竜太(彫刻家)とのアーティストデュオ「Nerhol」としても活動している。主な仕事に「東京都写真美術館」をはじめとした文化施設のVI計画、「第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」、「国際芸術祭あいち2022」、ブックショップ「POST」、「Tokyo Art Book Fair」、「新」POST」、「Art Fair Tokyo」、「takeo paper show 2018」、「トーマス・ルフ展」、「ISSEY MIYAKE」のアートディレクションなどがある。



リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s

LIVING Modernity: Experiments in the Exceptional and Everyday 1920s-1970s

会期 | 2025年3月19日(水)–6月30日(月)

休館日 | 毎週火曜日

※ただし4月29日(火・祝)と5月6日(火・祝)は開館、5月7日(水)は休館

開館時間 | 10:00–18:00

※毎週金・土曜日は20:00まで ※入場は閉館の30分前まで

会場 | 国立新美術館 企画展示室1E/2E(東京・六本木)

主催 | 国立新美術館、東京新聞、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁

協賛 | 鹿島建設株式会社、TOTO株式会社、

株式会社長谷工コーポレーション、YKK AP株式会社 (五十音順)

協力 | ミサワホーム株式会社、株式会社 竹中工務店、

株式会社新建築社、株式会社アルク、ウシオライティング株式会社

観覧料(税込)

一般1,800円、大学生1,000円、高校生500円

※中学生以下は入場無料 ※障害者手帳をご持参の方(付添の方1名を含む)は入場無料

2階企画展示室2Eの展示はチケットをお持ちでないお客様も

無料でご覧いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

お問い合わせ

050-5541-8600(ハローダイヤル)

展覧会HP | <https://living-modernity.jp/>



美術館HP | <https://www.nact.jp>

✉ NACT_PR

✉ thenationalartcentertokyo

✉ nact.jp

巡回情報

会場 | 兵庫県立美術館

会期 | 2025年9月20日(土)–2026年1月4日(日)(予定)

報道関係のお問い合わせ

「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」広報事務局(株式会社OHANA内)

〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-6 りそな九段ビル5F

E-mail | living-modernity@ohanapr.co.jp

関連イベント

展覧会開催記念シンポジウム

3/20(木・祝)14:00–17:00 (13:30開場)

会場 | 国立新美術館 3階講堂

登壇 | ケン・タダシ・オオシマ(ワシントン大学教授、本展ゲスト・キュレーター)、

佐々木啓(本展アソシエイト・キュレーター)ほか数名

※参加は無料ですが、本券の観覧券(半券可)が必要です。

※本シンポジウム詳細やその他の関連イベントについてはホームページをご覧ください。

※内容や日時は変更になる可能性がありますので、ご了承ください。

ミサワホームとの共催イベント

A/B MISAWA 4DAYS



建築/デザインの歴史と未来を考える

【Aプロジェクト】と【ミサワバウハウスコレクション】。

ミサワホームの2つのプロジェクトによる

近代住宅をめぐる講演／対談の4日

B | バウハウス特別講演会

「グロピウス、ミース、ブロイラーの住宅」

岸和郎(建築家、本展監修者)

3/22(土) 15:00–17:00

A | 連続対談

「コンテンポラリー・モダニティ——現代建築家が紐解く近代建築の巨匠たち」

司会 | 長田直之(建築家、本会場構成)

–「ル・コルビュジエ」富永譲(建築家)×岸和郎

3/29(土) 15:00–17:00

–「ミース・ファン・デル・ローエ」西沢立衛(建築家)×岸和郎

4/18(金) 17:00–19:00

–「土浦亀城」安田幸一(建築家)×岸和郎

5/17(土) 15:00–17:00

※いずれも企画展示室2E内の特設会場で開催します。

※参加無料。各回とも開始の2時間前より、

1階中央インフォメーションにて整理券を配布します。

※詳細についてはホームページをご覧ください。

※内容や日時は変更になる可能性がありますので、ご了承ください。

イベントHP | <https://misawa4days.com>



新 国立新美術館

THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

日本文化
JAPAN CULTURAL
EXPO 20

「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」

広報用画像一覧

広報用画像ご希望の際は、下記「広報用画像申込フォーム」でお申込みください。ダウンロードが難しい場合は、下記の申請用紙に必要事項をご記入の上、E-mailもしくはFAXでお申込みください。

広報用画像申込フォーム <https://tayori.com/f/living-modernity/>

FAX: 03-6869-7801 E-Mail: living-modernity@ohanapr.co.jp



<画像使用に際しての注意>

- 画像の使用目的は、記事、番組内にて本展覧会をご紹介いただく場合のみとさせていただきます。
- 作品画像をご掲載の際には、下記一覧をご参照の上、作家名、作品名、制作年、素材、所蔵先の明記をお願いいたします。
- 切り抜きやトリミングおよび部分使用、文字を含め他のイメージを重ねての使用はできません。
- インターネットでご紹介いただく場合は、72dpi以下、400×400pixel以下の解像度にし、コピーガードをかけてご掲載ください。
- 確認のため、原稿が出来上がりましたら、ゲラ刷り・原稿を広報事務局までお送りください。
- 掲載誌・紙（紹介号）、同録DVDほかを広報事務局まで1部お送りください。
- ご取材・撮影をご希望の場合、その他ご不明な点などございましたら、広報事務局までお問い合わせください。

1.	<input type="checkbox"/>	藤井厚二 聰竹居 1928年 撮影: 古川泰造
2.	<input type="checkbox"/>	リナ・ボ・バルディ ガラスの家 1951年
3.	<input type="checkbox"/>	フランク・ゲーリー フランク&ベルタ・ゲーリー邸 1978年 © Frank O. Gehry. Getty Research Institute, Los Angeles (2017.M.66)
4.	<input type="checkbox"/>	オットー・リンディッヒ 《ココアポット》 1923年 灰器 宇都宮美術館
5.	<input type="checkbox"/>	マルセル・ブロイヤー 《サイドチェア B32》 1928年 ミサワホーム株式会社 撮影: 立木圭之介
6.	<input type="checkbox"/>	本展宣伝ビジュアル ※クレジット不要
7.	<input type="checkbox"/>	「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 国立新美術館 2025年 展示風景 撮影: 福永一夫
8.	<input type="checkbox"/>	「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 国立新美術館 2025年 展示風景 撮影: 福永一夫
9.	<input type="checkbox"/>	「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 国立新美術館 2025年 展示風景 撮影: 福永一夫
10.	<input type="checkbox"/>	「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 国立新美術館 2025年 展示風景 撮影: 福永一夫
11.	<input type="checkbox"/>	「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 国立新美術館 2025年 展示風景 撮影: 福永一夫
12.	<input type="checkbox"/>	「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 国立新美術館 2025年 展示風景 撮影: 福永一夫
13.	<input type="checkbox"/>	「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 国立新美術館 2025年 展示風景 撮影: 福永一夫
14.	<input type="checkbox"/>	「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」 国立新美術館 2025年 展示風景 撮影: 福永一夫

貴社名	
貴媒体名／URL	https://
掲載予定日	【 月 日（発売・放送） 月号 】 コーナー名・特集名（ ）
ご担当者名	E-mail :
TEL	
□読者プレゼント（3組6名）を希望する（作品画像1点以上を使用してご紹介ください。） <ご送付先>〒	

広報用画像一覧

1.	2.	3.	4.
5.	6.	7.	8.
9.	10.	11.	12.
13.	14.		

【本展に関する報道関係お問い合わせ先】

「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」広報事務局(株式会社 OHANA 内)
 担当：妹尾・細川・津久井・山下
 〒102-0074 千代田区九段南 1-5-6 りそな九段ビル 5F
 TEL: 03-6869-7881 Fax: 03-6869-7801 E-mail: living-modernity@ohanapr.co.jp